論理的思考の訓練方法について（ワークショップについてのレポート）

ベルリン自由大学　川邊　亮

初めに

私は日本では大学受験生を対象とする国語専門塾において、話し合いを通して読む、書く、聞く、話す、という四つの要素を指導する授業を行っていた。毎週生徒にレジュメを書かせ、発表させるとともに、それと並行して作文や小論文も書かせていた。ドイツではドイツ人に対する日本語教育に関わっているが、日本人に対して日本語で日本語を教える方法は、彼らには使えないものと思いこんでいた。

今回の細川先生による日本語教育方法に対する第一印象とは、自分が日本で行っていた授業にかなり似ている、というものであった。話し合いを通して生徒に自己相対化させるというのがその骨子であると解釈したが、これはまさに私が塾の授業において強調していたものであった。

一致点を見いだせればしめたもので、説明はスムーズに頭に入った。その後にビデオで紹介された授業風景を拝見して、日本語学習者がこの種の話し合いにおいてどのような雰囲気で、どのような意見を述べるのかもおおよそ把握できた。いわゆる外国人に対しても話し合いによる授業が可能であることを知り、とても参考になった。ワークショップを実際に迎える前に、私にとっての目的はほとんど達成されていたようなものである。これは私にとっては幸運であった。

以上がワークショップを体験するにあたっての背景的な事柄である。

「動機」について

今回のワークショップについての説明を受けた際に、普段自分がよく考えていることについて取り上げるようにという指示があった。そこで、「論理的思考の訓練方法について」というテーマを選んだ。これが哲学を研究する際の私にとっての中心的テーマであり、日本語を母国語とする生徒に対してもこれを主たる眼目として授業をしてきたのであった。「普段自分がよく考えていること」という観点から見ても、また日本語で話し合いの授業をしてきたことをその場で反省するためにも、このテーマが相応しいと考えたのである。

続いて「動機」メモについて書くようにという宿題が出された。私がまとめた内容は次の通りである。

１　論理的思考能力を鍛えることに反対する人はいないが、その方法論となるとかなりまちまちのようである。

２　数学を学べば論理的に考えられる、という意見がある。高校時代までは個人的には数学は好きだったが、私はそれでは満足できなかった。数学や物理学以外の問題には特に限界を感じた。

３　欧米で発達したディベートを学べば情緒的な日本的思考から脱却できる、という意見もある。大学時代の二年間に英語のサークルでディベートを学んだが（全日本の大会で優勝したことがあります）、説得力のある議論を展開するという面では確かに効果はあった。しかし、一生満足できるだけの論理的思考能力がそれだけで身に付いたとは、到底思えなかった。

以上が「動機」であるが、次に「動機のまとめ」、つまり、この話の「結論」である。「私にとっての論理的思考の訓練方法とは、論理に着目して本を読むことである」、とまとめた。以上の「動機」および「動機のまとめ」に基づいて、二日目と三日目にディスカッションを行った。

二日目のディスカッション

この日は「動機」を吟味するディスカッションが中心であった。まずは一人のパートナーとのディスカッション、次はグループに戻ってその内容の報告、そして更なる意見交換という順番であった。

最初に A 氏の「動機」について討論し、次に私の番となった。初めに「動機」メモについて説明した。

A 氏からの第一の質問は、私は数学を不要と考えているのかどうかについであった。私は数学を否定しているわけではないのだか、この世のすべての問題を数学的な論理だけで解決できるとは思っていない。統計などがその典型であるが、事実確認的な面では数学的論理は有効である。しかし、事実の説明のあたりから大分難しくなる。つまり、自然科学的な問題を説明する際には有効だが、人文科学的問題や社会科学的問題については不適当な場合が多いと考えている。

第二の質問は、自分自身が本当に論理的に考えているかどうかの検証は可能なのかどうかについてであった。これに対しては二つの答えがある。他人に自分の考えを話して、相手がどの程度理解できているかを検証するというのがその一つ目である。もう一つは、一冊の本を読む際に、著者の用いている論理をどの程度把握できているかを吟味するということである。いずれにせよ、他者を媒介にすれば自分の論理性はある程度確認できると答えた。もっとも、これだけで論理的思考が達成されるわけではない。自己の論理性の吟味というのはそれ自体が哲学的な問題であり、やはり哲学書を通してその能力を獲得しなければならない。とは言え、哲学書を正しく読む大前提としても本を論理的に読む必要があるのである。但しそのディスカッションのときにはそこまでは話さなかった。

この二つの質問に答える過程で、私自身が自分の発言内容の全体像をまとめる必要が出てきた。そこで次のように相手に話した。「数学で得られる論理的思考能力では、自然科学以外の問題には適応が難しい。そうではなく、人文科学や社会科学の著作を論理に着目して読むことにより、対象にふさわしい論理を学ぶことが可能となる。ディベートやディスカッションにおいてはその参加者一人一人の能力が一つの上限になってしまう。しかし本を読む場合は、自分よりも遙かに高い能力を持った人物の論理を学ぶことが出来る。以上より、数学やディベートよりも本を論理的に読むことの方が重要である。」話し合いを通して、私の結論はこのように具体化された。

最後に、本を論理的に読むとは具体的にはどういうことか、という第三の質問があった。例えば、「A つまり B」と書いてあれば A と B とは言い換えの関係にある。「A しかし B」とあれば A と B とは逆接の関係にある。このようなことをすべて調べ上げ、そしてその文章全体の構成を吟味し、更にその構成がその文章のテーマに相応しいかどうかを検討するというのが私の答えであった。

ここまで話した後でグループに戻り、再び議論を続けた。以上の内容を簡単に説明した

後で、具体例を求められた。「例えば、『恋愛または友情』、という文がある場合には、『恋愛』と『友情』とは対になっている。そうすると、この場合の『恋愛』とは異性同士の関係を、『友情』とは同性同士の関係を示唆していることになる」、という具体例を出した。これは実はある本からの引用であり、その原文無しでは説明しにくいものである。とにかく私がここで伝えようとしたのは、「または」とか「しかし」という言葉に表される論理を吟味することにより、その真の内容が理解される、ということであった。しかし、その反響は私にとってはまったく予想外のものだったのである。その時の細かい話の流れは覚えていないが、要するに、「恋愛」という言葉が参加者に与えたインパクトがあまりにも強烈であったため、論理的思考の訓練の話はどこかに飛んでしまい、「恋愛とは何か」の話になってしまったのである。高校生からはこういう反応はあり得ない。彼らはいわゆる多感な世代に属するわけだが、まだまだそれほどの恋愛経験もなく、言語能力の点でも発展途上にある。したがって「恋愛」という言葉に対するこだわりそのものが未発達であり、その分だけかえって論理の方に意識を向けることが容易なのである。この話し合いを通して、相手に応じて具体例を吟味しなければならないことを再確認できた。

文章の意味というのはコンテクストによって全く異なるので、客観的な認識は困難ではないか、といった質問も出た。確かにそういう側面はあるのだが、それにしても、「A つまり B」という文は百年経っても「A つまり B」であり、その論理を押さえることの意義は消えない、といったことを答えた。

私は芸術をどう考えているのかといった質問もあった。私としてはすべての人が論理第一主義になることを求めているのではなく、論理的思考を訓練するときには内容よりも形式、感性よりも知性を重視するべきだと考えているだけである。論理的思考の訓練だけでは芸術家にはなれないだろうが、たとえ芸術を追求する人であっても、やはり論理の重要性は認めるのではないだろうかと答えた。

早大の院生の方から、なぜ私がこのテーマを選んだかについて質問を受けた。ここは実は悩んだところで、このディスカッションでどの程度プライベートな中身を話すべきかを思案していたのである。その結果世間に公表できる部分を「動機」として取り上げたのであった。その場での私の答えとは、「高校三年のあたりで色々考えることがあり、その時にこの訓練方法と出会った」、というものである。非常にぼかした言い方だが、これ以上の内容については伏せておくことにした。その出会いの後でこの訓練方法と数学やディベートなどを実際に比較していったのであり、そしてこの一連の過程が哲学や日本語教育に対する私の関わりの出発点となったのである。

三日目のディスカッション

この日は「動機」から「動機のまとめ」までの流れを意識して議論するようにとのことであった。私は昨日までの話をおさらいした上で、更に他の方からの意見を求めた。そして、ただ本を読むだけでは他者とのインタラクションが無いのではないかと尋ねられた。ここで私は重要な前提について話し忘れていたことに気づいたのである。私は哲学の教師の元でこの方法を訓練していたのであり、他者との相互作用が大前提となっていたのである。この質問のお陰で私の「結論」は更に補足修正された。

「動機のまとめ」、「仮説」

以上の話し合いを通して、私の「動機のまとめ」は次のようになった。「私にとっての論理的思考の訓練方法とは、信頼できる先生の元で、本を論理に着目して読むことである」。この師弟関係の部分が先のディスカッションによって思い起こされた部分である。「本から学ぶ」ということ自体もその本の著者との師弟関係の一つである。その意味では、師弟関係こそが根本だという結論でも良いのである。ただ今回は、書き言葉の重要性を強調してみたのである。

最後に

以上で一通り終わったわけだが、こうして自分自身がこの方法を体験し、それを文章化することにより、この方法の意味がまたよくつかめた。また、自分自身の根本を再確認することも出来た。ここまで収穫のあるワークショップというのは今回が初めてであり、細川先生並びに主催者の方々に深く感謝する次第である。